



歙討東錦繪

四二

~ 13
4055
12



門 へ13
號 4055
卷 12

仇討天貞東錦繪實記卷之三



目録

一 放釣まねり四布しほ之の怖おそ荒ら又また布ふ茂も之の花はな川がわ

戸とみみ事こと

兼あ徳とく海うみ八はち脚あし去い流なが格かく氣きがが変か更ま

一 服ころも新しん平へい馬ま鬼き子こ舟ふね神かみ糸いと指さしのの事こと

兼あ大おほ和わ倉くら長なが九く布ふ治ち由ゆがが身みのの上うへとと更ま

大正十年八月廿九日
本大學出版部氏 贈

仇討天貞東帛繪室員記卷之三

放釣とまれば江都こゝろを捕荒あらい又都みやこ一ひと處ところを捕花川はながわ

戸とへある事こと

兼あま徳とく海うみ鳥とり八助やっすけ去い龍りゆう控か為なか変かへ

きまは田村いんむら金かね江都こゝろを捕と八所やっしよを捕と八所やっしよ夜よ福井ふくい
町まちもあつてやむこととほむほむ口くち福ふくの
うへもてある人の何なにあれよのよと手て

あかけさびめて十八きより こころ 途へ こころ 花
P 何げソめあし出さまうこの まこと あり
やとふもあはれあはれ八雲かんの
あどあむんああひかれがさゆ
あまうせ あつ 海川 あつ 放泊 あつ 方 あつ せう
ふ色 あつ ども あつ せう あつ せう あつ せう あつ せう
あち あつ せう あつ せう あつ せう あつ せう あつ せう
あま あつ せう あつ せう あつ せう あつ せう あつ せう

おきし あつ 妻子 あつ 一 あつ つの あつ 事 あつ まで あつ あ あつ の あつ ひ
あ あつ たり あつ な あつ ん あつ せ あつ び あつ び あつ び あつ び あつ び
八雲 あつ の あつ 海川 あつ より あつ 大 あつ 河 あつ せ あつ あ あつ ら あつ づ あつ づ
り あつ 来 あつ り あつ 四 あつ 節 あつ を あつ 傳 あつ へ あつ 己 あつ 身 あつ を あつ 傳 あつ へ あつ ち あつ ら あつ づ
ころ あつ 新 あつ 入 あつ ち あつ ら あつ づ あつ て あつ 完 あつ 尔 あつ と あつ じ あつ づ あつ ひ あつ 私
事 あつ 海川 あつ を あつ 在 あつ せ あつ け あつ 放 あつ 泊 あつ づ あつ の あつ 事 あつ あり
て あつ せ あつ ひ あつ の あつ こと あつ け あつ せ あつ せ あつ せ あつ せ あつ せ あつ せ
ども あつ 夜 あつ ぢ あつ ん あつ の あつ 喧 あつ 嘩 あつ の あつ 事 あつ あり あつ せ

さて只今途巾めておろりー事の
の産け私事 海川めて放釣どの
らと信の海ーまごみあ後と口はれ
ておどりーみ柳むー(来り橋
のためと)来りーあうーあまの
者いーゆあへあり返りーんらど
ちろうげーおめきいあまへん河と
ぞんーたりーむきま(にぬまが
かむりー大男そぞるる 異本ナカと
まーりあまぬんーとこせー
てんあますりー私みま(海)あ
て切敷きんーとこせーあうるら
心の口くろひらやまうてくま(ま
切付りーとまゑゆらまうその海その
ものよぶ包ぶーはるる 柳橋の海
打也返りーありさそく河をう

お付人と教せしむる自分とうつて
おんとおのよハあきらむるとハハひる
かつかのさうさられしものぞもいさ人
ハ盗賊のさるづのしものめて能く
ハといひしまを人ハ去靴の格として
之を津のツカひひものかきしもの罪人
と何十人さうししめて出せんぎハ
かししるししつて解死人とぞハ

あーかまづハなる雷か自れ付て頭
台のののぞもありしつてりてその
あうみまをいしつての事 なるを
はらひハあうしつてをいしつて
あまはさるしつて 傳へる男とて
そのみおこしつてハハ希をいしつて
くまをいしつてのしつてりしが
しやこれ兄貴あせハさるごとくあれぞ

さしとひの歌名のりそかんそあひの
卯^う少^すたぐももるまき人^{ひと}びら〜井^い是^{これ}よ
り^りづら^らか^かつ^つて^て馬^ま麻^まの^の又^{また}雷^{らい}あ
か^か海^{うみ}人^{ひと}交^{まじ}〜そ^そあ^あぶ^ぶか^かま^まし^しみ^み態^{たい}
寝^い書^{しょ}と^とそ^そろ^ろ〜お^おせ^せて^てあ^あせ^せり^り
口^{くち}が^がお^おく^くか^か〜お^おき^き大^{だい}あ^あん^んの^の
う^うつ^つ〜お^おれ^れい^い巴^{おのれ}が^がお^おは^はと^とあ^あら^らん
と^とい^いよ^よの^のあ^あれ^れが^が〜サ^{せい}〜し^しま^まし^しま^ま

を^をひ^ひる^る〜け^けう^う〜い^いば^ばい^いあ^あん^んま^まの^のう^う
大^{だい}せ^せつ^つり^り〜し^して^ては^は〜し^しも^もろ^ろ〜や^やね^ねひ
の^の成^{せい}統^{とう}〜し^しら^ら〜か^か費^ひ〜あ^あり^り海^{うみ}た^たの
れ^れ〜れ^れ〜あ^あら^ら〜さ^さ〜ご^ごめ^めて^て案^{あん}〜し^して^てお^お
せ^せん^んま^ま〜是^{これ}よ^よ〜り^り〜し^し〜ご^ごみ^み〜ゆ^ゆ〜て^てあ^あん^んど
さ^さ〜せ^せん^んま^ま〜い^い〜ち^ち〜の^の〜て^て〜と^と〜い^い〜と^と〜あ^あ〜ひ^ひ
荒^あれ^れ〜い^い〜ち^ち〜は^は〜し^し〜ご^ごら^ら〜川^{がわ}
さ^さ〜し^し〜あ^あ〜り^り〜〜と^と〜ま^ま〜と^との^の義^ぎ士^し

とぞ知れぬ多し

服部平馬鬼子母神奉詣の事

大和守長九郎治世の事

爰に服部平馬ハ雷治を討ちて

とて其徳を尊ぶと云ふ

昔むんよてら一に命をまかす

みこころ切りに死せんもの

王の荒らうとて花川戸をさ

てをせしうとてあゆ途申され

ハ命とらん付かれも歎の程

うちとらうしてくまんと

を一の多ゆとみかたを居て

一うちと切付し

そをるるくれあみ切り

はらうちみハあはれ

平馬をばらんてあ申へるげ也花川
戸をさしてゆりりる平馬ハね
こびるげ也あこころのあを
ひかれども海ありはれはあ
ゆりてころゆりりるあるげ也
あせらう楊梳あやあけん
ますあつごころの石あやあり
眉間とうちちさき流る血も眼

み入りればせんころあて
あゆりりりるああ
ぐれごろの事あれば人ああ
らぬとさふひあいのああ
りるああああああ
ああああああああああ
これとああああああああ
ああああああああああ

己まの心もあつらへてまきづとまぢり
その心余を病いぞらふ人へ医療を
をばくくしれどもそのかひあるれ
ばまぢ夜そぞとそるればかんぢ
し毎朝の薬たりゆも平馬まづ
ら医者のかつて容辨とそ
あどしして実りまは親子のこ
あぢまはくはらみ次を病と病申

あぢまは是をよろこび平馬を病床の
もとまあぢさればんがそくあひ
くらましく食はら時と胎をおかよ
し病を付しあると床まあつて
ゆみ水魚のこぞありらるる
み治まゆが病を平人あのみを
曹司がや鬼子母神へ糸街せん
ののぢりりれは治まゆもよろこび

あつらば糸譜くくくまき屋ーこれ
快くなりあがまわれ氣りは
—をるるるたのこべりゆあり
あつらば途中の彩ー相色ぬ長
九節ーと目屋まきーとて治ま博が
妻あまらんぬつけ細くおきそ
平馬ぬ仕多くさせ雜司が谷茂
さくくく新々るあまほつ谷よりさる田

あつらば糸譜くくくまき屋ーこれ
快くなりあがまわれ氣りは
—をるるるたのこべりゆあり
あつらば途中の彩ー相色ぬ長
九節ーと目屋まきーとて治ま博が
妻あまらんぬつけ細くおきそ
平馬ぬ仕多くさせ雜司が谷茂
さくくく新々るあまほつ谷よりさる田

己が才のうへにうらうへに内をなす一はて
はとみこれららるごとく因果あるもの
何ぞとてゆつてるむびゆへ私事おと
芝口めて大和を長たせつとておあ
の仲屋の次男あつちかみへさるふかよ
い事所あまんあや山三神かかく我
た女あのみ井といふああどとらるる夜
ともなへかよひたがいの若衆れ何

やまより始終の事とゆへそくそく
いんく親この白あらへくあり
て之退んやたのよありやト仲の
町の茶やめて雷治をあし知る人
ありて治を姑みあらやさくおの井
か事をとるへくれが日れとやうも
こけおへへ連て之のくをへへ
りあめ付念子あや直をぬきとあへ

ねとくーの春吉原と欠落して治癒
かせるらみせんくしよむらりを何てみ
多坂としよと見えく居てやうく夜中
め治癒を治かうくみきこりしれが治癒
はぐみ聖日吉原へ行って何とお後
しらん金子七千あめて何うか
とひてこがぬきを治癒し金
治癒を治癒し何あおせし

お屋とすらぬしらぬ女がかくの地
おれれどもおしせんともくその日
より少をみてもくしらぬりそらく
衣敷と御物めをくしらぬりそらく
又六月迄まで次を治癒方もある
かり居るし何らとくし治癒を
トらるハ水くのやういおあはて
めいこくありしらぬありともく

まゝなぬのうへにうつとあむさち
い〜ゆとともいふを流〜りちが
たてをら枚めふやう〜云年より
あつてめてウ座にわけ度親〜の
病年と親子ともいひが〜いど
ゆゑどろりのゆかん病た〜りまて
ゆるり千石ゆき〜くの内事と
ゆめぞ平馬ゆてされがとよ浪と衆

事は度よびの病年ぢやうきはこれゆ〜るれが一命
とつけて情年こころきと張たがゆるれが〜も
そのあうと回まわ〜〜〜がや
主張まはりみまするる〜り〜り〜り
う〜も快年こころきはさせ〜ん侍さむらいが〜ら
ゆ〜〜と流なが〜り〜ら〜長九郎ちやうくわんは
ゆ〜〜り自みづか〜ん枚さ〜りあ〜ら〜
〜〜〜ら〜ら〜め〜ら〜ら〜ら〜

ハレバそのあつしやまご知らば懐孝
花川戸は糸を拵としくもの有り
かれハ已れぬふくまのこころに
たまふかれぬあつてはあぢ
をいふんとはけぬうま治ま書
と知らぬとんぬのこころの
のどよものあつちとあつと
せしあまは糸を拵とあつとあつと

親をハ何のこころに
徳をハ何のこころに
とたのこころに
いふのこころに
己があつちとたのまんとな
大いなる
少い
例

りー百一のりやれがこれかしの事
なればさかく快き事を待つての事と
むく居ると言へれば長九師乞
と夢てそれハ山寺の者ちびなり
親と今もと終よくなぶまを
る途もいなりがてーそのさけハ
ツギんーやります。教とて徳
存るのハとりよいかのよしの由
え入りー盗賊より大切のものを
かへすのめたひては終ままびー
その言はまはさうー徳存るのハ
りよ盗賊強さくあすよーあを
つけられーを治まはるまー
あきまさら徳存るが教とれー由
海ハありがたーます。ちの徳ハ
ましものなる川までぞくちのう

いづるのハとりよいかのよしの由
存るのハとりよいかのよしの由
存るのハとりよいかのよしの由
存るのハとりよいかのよしの由

ましものなる川までぞくちのう
ましものなる川までぞくちのう
ましものなる川までぞくちのう

うしろぞい知れし中へ人急きんみ山多やまづ
母あよび中へさびしうらひとやくこて
かこりたれが平馬へいばのうらへきんはか
くうめしてるなうらぬやめと
ゆり放蕩ほうたううらり出い家けるれがこれ
みうらうのうらもるうらうの
わああせうのうらちうらうもこれまたひて
大事なるま事なれと終おひくはし

うらみとく長九帯ハ何うさねを
平馬へいばとれを不あ審しんのあひあのえを
しううつらあどしあどさくきんを
母が神しんのあへあまのうで平馬へいばハ
治ちをちがが大だい病びやうのえ歌うためまうこととさ
しこれとゆらうらあむあのちち付せ洗せん
ああととくくああのううすすなり
うう茶ちやややののせせとと仕しるるとといい

ゆゑに——
あつちのひまは——
のこるが——
事か——
希——
や——
そく——
とく——

して天台——
禅——
日——
とがめ——
この寺——
長九希——
らら——
とて始——

こと事しるるにまじりてそのく(申す
 ハるれをて今日のく(まじりてまじりて
 申す)石塔を書入(まじりて)けり
 ぬくとまじりてとれこれら
 匠師の目限(まじりて)し(まじりて)
 申すまじりてと(まじりて)て
 化せし(まじりて)の(まじりて)申す
 ちつてた(まじりて)申す

は(まじりて)石塔(まじりて)の(まじりて)
 まじりてと(まじりて)と(まじりて)申す
 ぬと(まじりて)と(まじりて)申す
 だ(まじりて)と(まじりて)申す
 の(まじりて)申す(まじりて)と(まじりて)申す
 ぬと(まじりて)と(まじりて)申す
 ぬと(まじりて)と(まじりて)申す
 ぬと(まじりて)と(まじりて)申す

うの和^{あせう}あまやそのあうのかさされ
しもある^{ゆる}りしをドめてたどろく
なりかくて平^{へい}まる長九^{ちゆう}神^{しん}と回^{わい}屋^え
しざらちくとゆりらうかたその治^ちを
ゆが去^き年^{ねん}申^{しん}これあ大^お寺^{てら}の上^{うへ}人と
しひゆせと十^{じゅう}ち余^よの合^あるをうむひ
又^{また}そのうしゆも音^ねをばかしくめてかき
うけし合^あるのうでとあはせりそのし

はとむとくあこれき入^いと目^め行^ゆてと
せしものありあ^あ今^{いま}せや^やし^し零^{ぜい}々^ざは
きしハる治^ちをゆめがこびるありと
今^{いま}までたやるのこ〜ありひし
雷^{かみ}と長^{ちやう}九^く神^{しん}か一^{いっ}ち^ちめてるあち中^{ちゆう}ち
かとりし^し忍^{にん}忍^{にん}の形^{かたち}たてざんのみや
根^ねえや物^{もの}又^{また}八^{はち}ちあつあ^ああ^ああ^ああ^ああ^あ
けしんみみせるとやうし^し音^ねをばあはるん

かぎとましたくくのつり^{ゆんてい}とどめしん
くのゆらぎい^いつ^いの^いゆらぎ^いの
つりさぬらる^い活き^いあがる^い事
ありとた^いの^いざん^いぬん^いあり
い^いま^いん^いびと^いち^いび^いま^いを^い
碎^いま^いが^いこれ^いお^いの^いこ^いら^いら^い常^い別^い
り^いし^いの^い積^いり^い花^い川^いの^い花^い舞^い
ま^いが^いこれ^いと^いま^いづ^いの^いん^いこ^いら^いま^いま

ら^いら^いか^いげ^いの^いこ^いら^いま^いや^い天^い命^いの^い
は^いら^い福^いも^いあ^いら^いん^いと^いる^い一^い思^い事^い
を^いた^いも^いひ^いつ^いげ^いら^いあ^いら^いり^い一^い事^い
の^いこ^いら^いま^いづ^いの^いち^いは^いた^い一^い
ま^いの^いあ^いら^いら^いと^い鬼^い子^い母^い神^いの^いこ^いと
一^い平^いら^いな^いれ^いら^いら^いが^い身^いの^いこ^いら^い
あ^いは^いぬ^いと^いれ^いて^いあ^いの^いこ^いら^いら^い流^い
一^いら^いが^いま^いら^いと^いに^い活^いき^いあ^いがる^い

何くけうへいもこのが回悪とあり(筆)
バいうるる目も何とせんといさや
せんかやと木のひつでけてこのが
家とさしとぐりめり

仇討天貞東錦繪實記卷之三

仇討天貞東錦繪實記卷之三

目録

一 服部平馬治と教と事ちりそりへいまぢ

一 平馬長九郎(身)のとお徳の事へいま

仇討天貞東海繪實記卷之六

服於平馬治之世と叙は事

家子再神へ長九布とこのまひ
家海も神りれはさうそく
長九布のろも礼ちりあまう
院年まうとるごとく次はあまの

これハ活き曲ハ平馬ガかくりのねまき
めめられてめつけおらんをちかめり
ちか—くろ平馬ゴかくり—とんて
たそく今日ハおそり—があめま
てり—くろヤ雜國ガ各までふじ
ろの^{こち}なるらぬ^{まじ}ゆ—く—く事なる
れガ—くよりもきん^{へい}平馬
ハ活き曲かそく^{まじ}よりく—ハ—は

—くろヤ雜國ガ各ハ—く—の事
あれガ—く—く—く—く—
ゆび^まヤ—く—今^ま—く—
もぞ活き曲い—く—く—
ぞ—く—ガヤ^ま—く—ハ何^ま—く—
こ^ま—く—二里^ままたぶ^ま—く—く—
も今^ま—く—おて^ま—く—ヤ^ま—く—
その^ま—く—常^ま—く—州^ま—く—かけ^ま—く—

よりいともやせうりりとしてしる物
おさめ一云の返着るく衛手
さしてぞいりめり次を御しよ
りも平馬が侍く、麻呂をれを
己れ之りのおそりり一とあり
ひめつけあらんぬひは酒をさしめ
やせものせうらめ平馬は是より治
まぬの仕くさゆ

よかまを教むの條を思案し、
に家内このものを知らぬ親言
の由き入の平馬松と何事も
平馬もこれい讀し、
之れ日たきくろあま治ま御か
もさき、快きると大畧平念
念もさき、
のおあん治ま御か松えあ

まじいもん
まあのかんさつとぞくちまにまじい
うだむらうにこれとからゆりさぬ
くらあ—くらぞやそのうにまじい
が—目ごとのま—んり—これ用だ
ぶら節の老州茶の事までまよ
ぶらぶらの要口これとせがこり
—事—くら—こまぎ—り—

そともあのをしけい—のさ
いげせんしをうられびきんねん
—こころがま—り—はくはく
せよ極悪人り—こまぎ—り—
力量たぐれ—平馬あれが合割
かとお—て胸そを—り—
こころごとく目をつらりり
—ま—はた—

あつゝると治ま井が死がひみよぎひり
かげせ大ぢぢ〜して多むまのこころが
らり〜や生ら〜りもせん〜とぢぢぢ
く〜ら〜ひ居〜り〜ら〜が大かぢぢ
解ら〜し〜事ら〜れ〜ら〜るま〜はひ
ぢぢあよび〜ら〜付〜平馬〜は〜ぢぢ
け〜り〜人〜二十は付〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
よ〜ぢぢ〜と〜よ〜るれ〜が〜あ〜ぢぢぢぢ

と〜ぢぢひ〜ひ〜と〜ぢぢぢぢぢぢ
〜ら〜治ま井がよ〜の〜ぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢ〜く〜けてぢぢ〜ら〜ま〜せ〜て〜ぢぢ
ぢぢれ〜が〜あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
〜け〜ぢぢ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
と〜ら〜ら〜ら〜ら〜平馬〜は〜ぢぢぢぢ
ぢぢぢ〜ひ〜ま〜ぢぢ〜ら〜ら〜ら〜ら
ひ〜ぢぢ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

るれ長九郎ハ活いき惜いふ死いし〜
と何いや〜と死い骸いを何いふ多いめらふ
あんのからり〜ことなるれがや
ぎ〜とむらり〜とあひとん
でさ〜うつむき何いうあひの何い
ていあうららの澄い動いみそあのも
より何いつまり〜をよきうらとあせ
まども何いの何いりも何いらざればせん

かくつま〜とあへ平馬いハゆ〜と
ま何いり次いき惜いふ死いし〜とあひとん
てあひみねどらき〜とあひとん
せんこれあ川いハ何い命いまでを
あれこの事いゆびとあひとん
とあひとんあれと〜とあひとん
の積いめて七いさ〜とあひとん
ああ〜とあひとん

多き事ハやめ〜めいどいしれど
とや人せさくけやくめて始終の
く〜し〜あ〜い〜れ〜れ〜せのま
リ咽の〜い〜あ〜親〜し〜生〜あ〜銀
〜ま〜く〜あ〜ど〜ま〜く〜く〜け〜や〜
〜し〜り〜ま〜ぞ〜平〜る〜これ〜ま〜こ〜ま〜
〜ま〜考〜ゆ〜と〜い〜ひ〜ま〜こ〜不〜あ〜る〜り
と家ざん雜具と〜り〜り〜ま〜い〜金

子と〜り〜あ〜と〜ん〜と〜り〜綴〜し〜送〜り〜し
〜り〜さ〜ら〜ま〜ま〜い〜長〜九〜希〜一〜ま〜人〜と
山と〜し〜作〜げ〜河〜と〜し〜作〜げ〜河〜り〜ら〜を
平馬ハ〜り〜ら〜と〜ま〜い〜長〜九〜希〜と〜り〜ん〜で
〜ら〜ら〜ハ〜已〜れ〜その〜ち〜と〜ら〜ら〜あ〜る〜く
〜ら〜く〜ら〜ま〜い〜と〜り〜て〜海〜世〜は〜ま〜ぎ〜人〜み
〜ら〜げ〜あ〜め〜り〜と〜て〜卵〜み〜仕〜差〜く〜ら
あ〜り〜〜分〜か〜る〜し〜ま〜と〜ら〜ま〜音〜田〜の〜人

あれぞよまほしきぞとていふ事も
るはれはこれよりそのあう
のわらうりあめとぞち親の
あひびして大和をかくまひ
これぞあうのぞんとてあひ
りしあまの愛はあまの
目のまはりあうりとていふ
よりしてあまのちをわらうり

はあせんといふ事一談のあま
るまにああふていふ死より
あまのあまのぞしてせうく
とも命をたたく人かまひ
あまのあまのぞしてせうく
あまのあまのぞしてせうく
あまのあまのぞしてせうく
あまのあまのぞしてせうく
あまのあまのぞしてせうく

むる——く——あるなり——そのあり
とらふ——年——若るればかひなくては
亦のちあるべし——一日もをく——
とゆらせし——とねがふべし——
あめり——教訓されば長九師も
かん——入何とぞいせさそをゆつてねが
ひ——なり——なり——なり——
つ——非人——とるより——
つ——

く——は——は——は——
れが平る——とすてそのあま——
つ——
親子の——の——と給ひる——
とらふ——事——なればおの——
とあさせ——一生の——を——
く——
我——

おれへ一う一週日あててころが運つて
ていへりのりおれさんあつたそのせり
はあやういなるがうへ居てころは後世
とともむらひのまじりかきこゝろの
がこりいひまきうきうへいれかゝるまで
なせし事どもまじりし一明しきころ
さづーと山取に來は希に枯がまあり
恋慕し伯父又希に枯つとまじりし一物
うぶめて金子をうむひまよりいへん
おて伯父ハち枯つがせるなるりよとい
りせんとおしよあるころ次を枯がめ
てのまじりあやこれとあやといひかく
のまじりのまじりうへなるりそてたて
それゆへその上へなるりそてみ希に
枯つがめ人の思か子らあまじりころ
て知れぬれがいとまじりハち枯つる事と

おれへ一う一週日あててころが運つて
ていへりのりおれさんあつたそのせり
はあやういなるがうへ居てころは後世
とともむらひのまじりかきこゝろの
がこりいひまきうきうへいれかゝるまで
なせし事どもまじりし一明しきころ
さづーと山取に來は希に枯がまあり
恋慕し伯父又希に枯つとまじりし一物

くまの持の「ひさし」ぞんせむら後また
つ事ぞんせむらび何事し佛祿
のかとゑのむより印さしなるま
と流してきくはるま平馬もかましが
あしきくろろとあむんめれひまの
おのあゑとのけりもてふびるまが
こくきんしくろろもさしりま家
店をしりろへ人前のあざりり

あしきくろろそのあゑしれあまのこび
しきあまのびりまがそれまごの
かんとんとん（よあざり）のひま
あんとんあゑひまけりしれより平る
いあまのこゑのうまあまのいあま
ろろかまがいろろるる借家あても
せんとき長九希とあ人語あま
東屋をかりり日し海術あま

丹西の久保よりしりぬりり社建継核
日一その西とほりりははらひ
空伏あつればは是丹家能ともろ
がし一とらうらうらとよはけて地面
とるこそ長九節一り中付職人あを
ちぜひ入ざんとよ善徳いそがはへ
一合子の入用ひあまらばあまを
一あはま一とて修治とまらうらうら

一これが長九節一り中付職人あを
ちぜひ入ざんとよ善徳いそがはへ
一合子の入用ひあまらばあまを
一あはま一とて修治とまらうらうら
大名より善徳をさくれりさうとい
ひあま一不日よ大度なれりあせ
しるが内の送存をさしあつて
恰も一城の太守のさうまより
て善堂仲るり女少のさめり
のく平るがたもあつた時ハ宗連の

して名も服於雲長と袂と何れもめ
師範とくしりれが門入目し母を
有り川原よおお馬のたもらひ
もろく江戸申これを批判して
る一由井の西雪が毎来あるん
とる山家せごうらるうりけを

仇討天貞東洋繪巻記巻之廿四終

